

一本筋の通った教育に支えられて

江口裕之 北九州高専 化学工学科4期 78年卒
CEL英語ソリューションズ最高教育責任者
NHK教育テレビ「トラッドジャパン」講師



2010年「トラッドジャパン」収録スタジオ（NHK放送センター）
左=江口裕之 右=共演者の Stuart Varnam Atkin 氏

「トラッドジャパン」（本放送毎週火曜午後11時10分）の講師を務めている。日本文化を英語で説明するための番組である。2009年11月に母校、北九州高専の塚本寛学校長に、「卒業生の活動の報告として自著ならびに「トラッドジャパン」のテキストをお送りさせていたのだが、学校長が番組をご覧になったことがあり、感激のご返事をいただき感謝した。

その後、北九州高専で現在教鞭を取っておられる入江司先生が私と同期であることが分かり、入江先生のご案内で2010年6月、母校の北九州高専を訪ねることになった。1978年に化学工学科を卒業して以来、実に32年ぶりだった。夜には塚本学

校長にもお会いし、酒を酌み交わしながらお話しさせていただいたが、塚本学校長も入江先生も私にお尋ねになったのは、「なぜ高専から英語講師に？」ということだった。

音楽の道へ

北九州高専化学工学科に入学したのは1973年だったが、その前年、高専祭で初めてキャンパスを訪れ、迷わず、高専への進学を決めた。その理由は、もともと科学が好きなのもあったが、生徒指導や受験指導に重きを置く高校に比べ、自己の責任において学問を追求する力が求められ、社会で即戦力となる専門知識の教育が行われていたことであつた。一方、趣味として、幼い頃から楽器が好きで、中学の頃からバンド活動をしていた。高専ではクラブには属さずに専ら勉学に集中し、その他の時間は全て音楽につき込んでいた。1978年、卒業の年、就職と音楽の道の二者択一を迫られることになったが、音楽を断念することはできず、仲間とカント

リー音楽のバンドとしてプロ生活に入った。1978年夏、山口県岩国市の米軍基地の専属バンドの地位を得、約4年間演奏した後、米国を回り、1982年には東京へ進出した。カントリーソングを歌うにも米軍基地で活動するにも、英語は必須であったため、英語を独学し始めたのはその頃だった。東京では、ある音楽事務所に所属し、都内ライブハウスや横須賀・横田などの米軍基地での演奏の他、CMやバックバンド、東京ディズニーランドでのミュージカルショーなどをこなしながら、日本全国を巡業し、4年が過ぎた。高専から方向が180度異なると言ってよい音楽の世界へ飛び込んだ私だったが、高専で学んだことがその先、私の経歴に大きく関わっているとは想像すらしていなかった。

音楽から英語へ

やがて、私個人の興味は音楽から英語へとシフトしていった。ミュージシャンも若い頃は良いとして、30代になっても続けるべきものか、バンド仲間全員が悩

なぜ高専から英語講師に？

現在、東京都新宿区高田馬場でCEL英語ソリューションズという英語学校を運営しており、2009年4月からNHK教育テレビの英語教育番組「ト

んでいた時期でもあつた。そのような状況を察知してか、私たちに声をかけてくださったのが、熊本在住で世界規模の活動を行っておられる生涯の恩師、カントリーシンガーのチャーリー永谷さんであつた。1986年3月、チャーリーさんが経営するカントリーバー「グッドタイムチャーリー」（熊本市）に我々をハウスバンドとして迎えていただいた。各メンバーは、グッドタイムチャーリーで夜演奏を続けながら、脱音楽生活のための資格取得を目指したが、私は多少なりとも知識のある英語から着手し、英検1級を目指すことにした。

1986年12月、英検1級に合格、日本英語検定協会（英検の実施団体）から成績優良賞、日本英語教育協会（財団法人）から文部大臣賞をいただき、これが熊本市の英語界でちょっとした話題となった。当時の熊本県知事は後の総理大臣、細川護国氏だったが、「熊本テクノポリス構想」という方針を打ち出し、自らも財団を抱え、熊本テクノリサーチパークの建設を推していた。これが幸運であつた。もともと英語界には理系の出身が少なく、当時の先端技術について知識を持つ者が少なかったのだ。Stanford Research Institute

から訪問団が来た際に、私が高専を出ていることを知った熊本市の国際交流課から通訳の依頼があつた。バイオテクノロジーノロジーも半導体技術も、高専で学んだ科学の延長であり、通訳程度であれば難なく説明も可能で、高い評価をいただいた。その後、熊本のNEC工場やリサーチパークなどで通訳を行い、さらに科学分野を中心に医療や醸造関連の通訳・翻訳も手掛けていった。

オ市長のエスコート通訳をさせていただいた。訪問団の熊本視察は文化交流の側面が強かったため、通訳には両市の歴史や文化の他、日本の伝統文化や社会に関する知識も求められていた。科学には強いが文化に弱いと自認していた私は、日本文化の勉強をやむなくされた。そこで知ったのが、外国人観光客を外国語を用いて案内するための国家資格、通訳案内業（現通訳案内士）試験だった。試験は英語・地理・歴史・一般常識の4科目と2次試験（口述試験）からなるが、苦手であつた地理・歴史・文化の学習に没頭し、1988年に一発合格を果たした。その後、東京へ戻り、同国家資格受験の予備校で13年間講師として働いた。その間、日本全国を歩き回って日本文化を研究したが、科学の知識が日本文化のあらゆる側面とリンクしていくのを実感した。例えば、鍛造の焼き入れや釉薬の発色現象の説明には無機化学の知識が必要だし、発酵や食品加工などの食品化学では有機化



2010年 CEL英語ソリューションズ第1教室（東京・高田馬場）教卓=江口裕之
(http://www.cel-eigo.com/)

英語と文化と科学

大きな転機が訪れたのは、1987年に熊本市が米国テキサス州サンアントニオ市と姉妹都市関係を締結した時だった。数度にわたってサンアントニ

オ市長のスコート通訳をさせていただいた。訪問団の熊本視察は文化交流の側面が強かったため、通訳には両市の歴史や文化の他、日本の伝統文化や社会に関する知識も求められていた。科学には強いが文化に弱いと自認していた私は、日本文化の勉強をやむなくされた。そこで知ったのが、外国人観光客を外国語を用いて案内するための国家資格、通訳案内業（現通訳案内士）試験だった。試験は英語・地理・歴史・一般常識の4科目と2次試験（口述試験）からなるが、苦手であつた地理・歴史・文化の学習に没頭し、1988年に一発合格を果たした。その後、東京へ戻り、同国家資格受験の予備校で13年間講師として働いた。その間、日本全国を歩き回って日本文化を研究したが、科学の知識が日本文化のあらゆる側面とリンクしていくのを実感した。例えば、鍛造の焼き入れや釉薬の発色現象の説明には無機化学の知識が必要だし、発酵や食品加工などの食品化学では有機化

学の知識が欠かせない。建築・交通・工芸・芸能、さらには日本の地理や歴史も、一歩踏み込むといずれも科学の知識なくしては説明できない事象ばかりである。そこから、「理系が見た日本文化の英語説明」という独自の分野の開拓が私の新たな目標となった。

2001年、時事英語、英検1級通訳案内士国家試験などの教育を行うCEL英語ソリューションズを設立し、



インターネットを使ってストリーム方式の授業配信を行ったが、おそらく日本初であっただろう。このプログラムも全て自製であったが、高専で学んだコンピュータ知識がここで生かされ、授業教材やパンフレットなども全てDTP技術を使って内製した。同年、自著「英語で語る日本事情」をJapan Times社から出版したが、それまでの私の知識の結集とも言える書となった。その本を読んでいた

だいたある方から思いもかけぬオファーがあった。

一本筋の通った教育

2008年、NHKエデュケーショナルが日本文化を英語で説明するというテレビ番組を企画し、私が講師に抜擢された。これが「トラッドジャパン」である。音楽時代に培ったパフォーマンス力がこので発揮されることになるとは思っても

いなかった(笑)。思えば、高専と音楽、英語と文化と科学など、一見どれも無関係な分野のようだが、自分が今なすべきことに専念し、努力を積み重ねれば、それぞれの努力がリンクしていき、自分にしか歩めない道がおのずから開けていくものなのだろう。後に番組プロデューサーから聞いた話だが、私を講師に選んだ大きな理由は、「言葉について、日本の文化について、一本筋が通ったものを

持っている」ことだったそうだ。その一本の筋を作ってくれたのが、高専で学んだ知識や思考力に他ならないと、私はつくづく思っている。「人間力のある技術者」を育てるといふ、一本筋の通った高専での教育が今の私を育ててくれたことに改めて感謝するとともに、高専での勉学が無限の可能性を持っていることを世に知っていただき、全国の高専生諸君にエールを送りたい気持ちである。

じである。例を挙げるときりがないが、文化というところ、とかくその精神面ばかりが強調されがちだけれども、文化を担う当事者からすると、それぞれが科学的根拠に基づく知恵や日本の地理・歴史・生活・社会という特殊状況から必然的に発生したものが非常に多く、そこには古今を通じた普遍的日本人の価値観が存在している。授業の中で私は一貫して、それぞれの文化が持つ地域的合理性に着目することが重要で、その合理性はその文化に生きる人たちにしか理解できないものがあると述べてきた。日本は今、観光大国を目指している。そういう時代からこそ、日本人自らが独自の観点に立つて日本や日本文化を説明する必要があるのだと思う。

「英語で語る日本事情」の根底にある科学的な視点



「英語で語る日本事情」

著者／江口裕之 ダニエル・デューマス
単行本(ソフトカバー)／223ページ
出版社／ジャパンタイムズ(2001.5.5)
1800円

それまでの日本文化の英語説明は、外国人の視点に基づくものが多かった。確かに、外国人が書いた日本学の名著は数多くあるが、私がこの本で述べたかったのは、日本に生まれ育った日本人の感性がなければ説明できない事象も数多くある、ということである。例えば、日本人が四季を強く意識する大きな理由は、日本が緯度に比して冬が寒いためで、夏冬の寒暖差が大きくなり、また雨も多い。当然、雑菌が繁殖しやすくなり、水や殺菌効果のある塩・酒などによる清めが神道の重要な儀式となったし、清浄さを保ちやすくするために高床式の住居が発達し、屋内では履物を用いない文化が発達した。また、生魚を素材とする艦に殺菌効果を持つ酢やわさびが用いられ

ているのも先人の知恵である。江戸時代の江戸では玄米を精米した白米を食することが多くなったが、精米する際に除かれる米糠にはビタミンB1が多く含まれる。必然的に江戸ではビタミンB1の欠乏による脚気が流行したが、それを予期していたかのごとく、米糠で漬けた糠漬が発達し、ビタミンB1不足を補う形となった。日本の携帯電話の進化を「ガラパゴス症候群」と評する人も多いが、江戸時代の茶の湯や歌舞伎や落語や浮世絵の発達もまさにガラパゴス化していたと言えるだろう。ところが、今ではいずれも世界に誇る日本の伝統文化である。これらは庶民文化の「遊び心」から生まれたものだが、考えれば、世界の先端を行く日本のロボット工学と発端は同

じである。例を挙げるときりがないが、文化というところ、とかくその精神面ばかりが強調されがちだけれども、文化を担う当事者からすると、それぞれが科学的根拠に基づく知恵や日本の地理・歴史・生活・社会という特殊状況から必然的に発生したものが非常に多く、そこには古今を通じた普遍的日本人の価値観が存在している。授業の中で私は一貫して、それぞれの文化が持つ地域的合理性に着目することが重要で、その合理性はその文化に生きる人たちにしか理解できないものがあると述べてきた。日本は今、観光大国を目指している。そういう時代からこそ、日本人自らが独自の観点に立つて日本や日本文化を説明する必要があるのだと思う。